

アトピー性皮膚炎治療研究会
第23回シンポジウム

スポンサードセミナー①

[日時] 2018年2月10日(土) 9:30~10:20

[会場] ソニックシティホール 4階 国際会議室

座長

勝沼 俊雄 先生 東京慈恵会医科大学附属
第三病院小児科 教授

水谷 仁 先生 三重大学
名誉教授

演者

小児アトピー性皮膚炎治療における
early intervention

堀向 健太 先生 東京慈恵会医科大学
葛飾医療センター小児科 助教

アトピー性皮膚炎の
最新の研究知見と治療

今井 康友 先生 兵庫医科大学
皮膚科学 講師

共催:アトピー性皮膚炎治療研究会第23回シンポジウム/
グラファラボラトリーズ株式会社

GRAFA
LABORATORIES

グラファラボラトリーズ株式会社

小児アトピー性皮膚炎治療における early intervention

堀向 健太 先生 東京慈恵会医科大学 葛飾医療センター小児科 助教

アトピー性皮膚炎(AD)は、最も一般的な炎症性皮膚疾患のひとつであり、アトピーマーチの起点になることが明らかとなっている。そのため、ADの発症を予防(一次予防)し、発症早期に介入(二次予防)するという Early Intervention の重要性が増している。我々は、新生児期からの保湿剤塗布がAD発症を有意に抑制し、皮膚バリア機能低下を反映するTEWL高値群により効果的であることを報告した。我々の検討はハイリスク児に対する検討であるが、最近、本邦から、健常新生児に対しても保湿剤の早期開始が皮膚トラブルやおむつ皮膚炎を減らすという報告が発表されている。さらに、保湿剤塗布によるAD予防の理論的な裏付けに関し、理化学研究所の研究チームより、“ダブルスイッチ数理モデル”が提唱され、検証が進んでいる。ただし、アトピーマーチ阻止に関しては、スキンケアに加え、AD発症早期からの積極的な治療介入・離乳食早期開始などを併用する必要があるのではないかとと思われる。現在までに報告されてきた Early Intervention に関する研究結果を概説し、現在考えられる一次・二次予防策に関して考えてみたい。

アトピー性皮膚炎の最新の研究知見と治療

今井 康友 先生 兵庫医科大学 皮膚科学 講師

アトピー性皮膚炎(AD)は獲得免疫だけでは説明できず、自然免疫、汗やバリア機能、細菌叢、痒痒などが影響する多因子疾患であると考えられる。免疫には獲得免疫と自然免疫がある。獲得免疫系のリンパ球であるTh2細胞がダニ・スギといった抗原を認識して活性化するのに対して、自然免疫系のリンパ球である2型自然リンパ球(type 2 innate lymphoid cell: ILC2)はIL-33などの炎症性サイトカインを認識してIL-5やIL-13などの2型サイトカインを産生する。アトピー性皮膚炎(AD)はIL-33が表皮で高発現する疾患であるため、この病態を再現した遺伝子改変マウスを作成したところ、ILC2の活性化を伴ったAD様の皮膚炎を自然発症し⁽¹⁾、さらに加齢に伴ってアトピー性角結膜炎も自然発症した⁽²⁾。ヒトにおいても、ADの皮疹部やアレルギー性眼疾患ではILC2が増加している。また、T細胞と違いILC2は活性化後にactivation-induced cell deathで消去されず、ADの難治化に関与している可能性も否定できない。本講演ではADに関与する自然免疫と、それを標的とした新しい治療を考えてみたい。

(1) Imai Y, Proc Natl Acad Sci U S A 110: 1392-6, 2013

(2) Imai Y, Sci Rep 7: 10053, 2017